

ブロンテ姉妹の生涯(2)¹⁾

和 知 誠 之 助

3) 死とエミリ・ブロンテの『嵐が丘』

前回の終わりで、シャーロット・ブロンテの小説の中で最も親しまれている『ジェイン・エア』という情熱の書は、彼女が失意のどん底にいた時、父の目の手術に付き添って、マンチェスターの旅の宿で書き始められたと述べた。父の目が見えなくなりはいしないかという不安、ブランウエルの墮落、自分たちの学校を持つ計画の挫折、さらに初めて出版した詩集も世の注目を受けることなく、小説を出版してくれるところも見つからない——そうしたすべての状態がブロンテ一家の将来の上に黒い暗雲をたれこめていた。そうした逆境が、というより、その逆境こそ、不屈の魂シャーロットに幸せな環境からは得られない刺戟を与えて、新しい創造の意欲をかり立てたのである。

『ジェイン・エア』は翌1847年8月に書き上げられ、その原稿が出版社に送られると、それを讀んだ社主は感激し、10月に一般に発表した。発表と同時に『ジェイン・エア』はたちまち大きな反響を巻き起こし、多くの作家や批評家から賞讃されたのみでなく、一般の人びとも喜んで読み、最初の年に3

- 1) これは「ラジオ関西」の「人間学講座」において放送した原稿（2月17日と24日のもの）に加筆したものである。
- 2) 例えば *Westminster Review* の1848年1月号にのった評（署名はしてないが、G.H. Lewes のもの）は、‘Decidedly the best novel of the season ; and one, moreover, from the natural tone pervading the narrative, and the originality and freshness of its style, possessing the merit so rarely met with now-a-days in works of this class, of amply repaying a second perusal.’ と激賞している。この G. H. Lewes(当時著名な批評家で、のちに George Eliot と深い関係をもつ)は、その後 Charlotte と文通して Jane Austen をすすめて、それについて二人の間に論争がかわされたことは有名である。

版を重ねるほどの大成功を見た。

『ジェイン・エア』の大成功は、長い間日の当たらなかったブロンテ家に一条の光を射し込んだことになる。エミリの『嵐が丘』とアンの『アグネス・グレイ』は他の出版社³⁾が出版を約束していながら、まだ出版されていなかったが、『ジェイン・エア』の大成功を見たその出版社は、『嵐が丘』なども『ジェイン・エア』の作者の作だとして、契約以来2年近くたってやっと出版した⁴⁾。しかし『嵐が丘』も『アグネス・グレイ』も世評はあまり香ばしくなく、現在の高い評価を考えると不思議に思えるほどだが、優れたものの真価が認められないことは、芸術の世界のみでなく、人間の世間にはありがちなことである。

イギリス中に大反響を巻き起こした『ジェイン・エア』の作者の名は、詩集の場合と同じく、カラー・ベルというペンネームが用いられていたため、読者はその作者はどんな人か、男か女かという好奇心にかられた。その作者は牧師に違いないと言う人もあり、なかには自分が作者だと名乗る牧師も現れる仕末で、それを出版したスミス氏自身も作者を知らないために、様々な、まったくでたらめな臆測が行なわれた。その頃アンの二番目の小説⁵⁾が出版され、その出版社はアメリカのある出版社にそれを『ジェイン・エア』の作者のものだと報らせたことがスミス氏の耳に入り、予期せぬ混乱に驚いたシャーロットは、意を決して本名を明らかにすることにした。

ブロンテ姉妹が詩集も小説もペンネームで発表したのには種々の理由がある。エミリは特に自己を知られることを極度に嫌ったが、当時は女性が男性より社会的にも知的にも低く見られていたために、女性の作品として偏見をもって評価されることを彼女たちが嫌がったのも、大きな理由であった。⁶⁾

3) T. C. Newby, London.

4) 1847年12月。

5) *The Tenant of Wildfell Hall*, by Acton Bell. T. C. Newby, London, 1848.

6) *Wuthering Heights* の1850年版につけた“Biographical Notice of Ellis and Acton Bell”の中で Charlotte は次のように述べている——‘Averse to personal publicity, we veiled our own names under those of Currer, Ellis, and Acton Bell ;

ともかくも『ジェイン・エア』が世に出て1年半ほど後の1848年7月に、シャーロットはアンを連れてロンドンの出版社を訪れて正体を明かした。社主スミス氏は、流行おくれの服を着た蒼白い顔の娘から『ジェイン・エア』の作者だと言われて、最初は当然驚いたが、事情がわかると興奮して大喜びした。二人はスミス氏の家に滞在するよう招待され、数日間ロンドン市内を案内してもらったり、オペラにも案内され、きらびやかな首都の華麗さに戸まどいながらも楽しい日々を過ごし、しかし疲れ果てて田舎に帰った。その後スミス氏との親交はずっと続き、その後の小説のみでなく、妹たちの作品も再版してもらったり、また一時二人の婚約の噂まで立ったこともある。

ともかくも、これによってシャーロット・ブロンテの名はイギリス中に知れわたり、当時の優れた小説家の多く、殊に『虚栄の市』の作者として盛名をはせていたサッカレーや、またギヤスケル夫人とも親しくなった。このギヤスケル夫人は、のちにシャーロットの伝記を書いたが、それはイギリスの最も素晴らしい伝記の一つとして今も広く読まれており、私もそれに負うところが大きい。

『ジェイン・エア』の成功によってシャーロットは有名になり、妹たちの小説も出版され、ブロンテ家に明るい光が射し始めたのも束の間で、再び暗い闇に閉ざされて行く。ブランウェルはロビンソン家の家庭教師を解雇された後、家にあって無為放らつな日々を送っていたが、彼が愛されていると誤解していたロビンソン夫人が夫の死後再婚するとの噂が流れてくると、彼はますます狂気のように夫人への恋情にもだえ苦しみ、身体も一段と衰弱し、ついには赤い髪をふり乱し、頬は落ち、顔色は黄色になり、目は狂気じみた光を放ち、苦悶のうちに1848年9月24日、31才の若い命を終えて了う。

彼の最近の行状に悩んでいた父や姉妹も、かつては絶大な期待をかけてい

the ambiguous choice being dictated by a sort of conscientious scruple at assuming Christian names positively masculine, while we did not like to declare ourselves women, because—without at that time suspecting that our mode of writing and thinking was not what is called “feminine”—we had a vague impression that authoresses are liable to be looked on with prejudice.’

た彼の悲惨な死に直面して大きな打撃を受けたことは言うまでもない。この日頃彼をうらんで遠ざかっていたシャーロットも、それから1カ月ほど病床につき、亡き弟をしのんで苦しい日夜を過ごした。

エミリはシャーロットとは違ってブランウェルの非行には寛大だったが、その葬式の日墓地で風邪を引き、その感冒がなかなか直らず、目に見えて衰弱して行った。ついには歩くのにも息切れするようになり、身体はやせ細って蒼白になり、不安にかられるシャーロットは薬や医師の診察をすすめた。しかしエミリは断固として拒絶した。⁷⁾そして誰が見ても苦痛にゆがんだ身体を引きずるようにしながら、自分の務めとしていた毎日の家事をきちんと果たした。彼女は自分の死を自覚していたのであろうが、このようなエミリの姿を思うと、彼女の詩の一節が実感をもって我々の胸に響いてくる。彼女は書いている——「強くわれは立つ……わが胸は自由、わが魂は自由……」⁸⁾と。

1848年の暮エミリの病は重くなるばかりで、誰の目にも死の近いことが明白になった。エミリはそれでも医師も薬も近づけず、黙々と少しも変わらない生活を続けたのである。シャーロットは『嵐が丘』につけた序の中で、死を目前にした妹について次のように述べている——「エミリは急速に衰えて行きました。私たちから飛び去ったのです。しかも肉体的に崩れて行くのに、精神は私たちがそれまで見たこともないくらい強くなって行きました。……男性よりも強くて、子供よりも単純で、彼女の本質は毅然としてひとり

7) Charlotte は Branwell の死後1カ月ほどの1848年10月29日付の Ellen Nussey あての手紙に次のように記している——‘I feel much more uneasy about my sisters than myself just now. Emily’s cold and cough are very obstinate. I fear she has pain in the chest, and I sometimes catch a shortness in her breathing, when she has moved at all quickly. She looks very, very thin and pale. Her reserved nature occasions me great uneasiness of mind. It is useless to question her; you get no answers. It is still more useless to recommend remedies; they are never adopted. Nor can I shut my eyes to the fact of Anne’s great delicacy of constitution.’

8) ‘Strong I stand, . . . Free my heart, my spirit free; . . .’ (*The Complete Poems of Emily Jane Bronte*, ed. C. W. Hatfield, p. 55.)

立っていました」⁹⁾と。

エミリは他の同情やあわれみを受け入れなかったのみでなく、自らを憐れみ悲しむこともしなかったのだ。他に対しては極めて寛容で情深いのに、自分には一片のあわれみも許さず、精神は肉体に容赦しなかったのである。彼女は死を少しも恐れていないようで、朝は7時に起き夜は10時まで床につこうとせず、手も震え足もよろけ、目もかすんでいながら身の廻りのことで他の手を借りようとはしなかったのである。¹⁰⁾

12月19日の朝エミリは起きると身体がよろめいて着物を着るのにも苦しんだが、それでも手伝ってもらおうとはせず、ひとりでよろめき息を切らしながら階下へ降りて行った。シャーロットは妹を慰めようと、妹の好きなヒースの枯れ枝を取って来て見せたが、エミリにはそれを見分ける視力も失なわれていた。また彼女はだんろの前に座って髪に櫛を入れようとしたが、櫛が手から落ちても捨い上げることもできなかった。正午ごろエミリはやっと医師に診て貰ってもいいと言ったがすでに遅すぎた。2時ごろソファから立ち上がろうとしたが倒れて了った。彼女は目を日の光からそらし、それから息を引きとった。その時30才を5カ月過ぎたばかりであった。

不幸はこれでもまだ終わりにはならなかった。末のアンもすでに数年前から健康を害していたが、エミリが亡くなって3週間目にまた感冒にかかり、医師に診てもらおうと重態だと知らされる。死の近いのを自覚したアンは、以前行ったことのある北の海岸¹¹⁾に行きたいと言い出し、周囲の人はみな止めたが、日頃はおとなしいアンも、この時は海岸行きを言い張るので、シャーロ

9) 'She sank rapidly. She made haste to leave us. Yet, while physically she perished, mentally she grew stronger than we had yet known her. . . . Stronger than a man, simpler than a child, her nature stood alone. . . .'

(‘Biographical Notice’ prefixed to the 1850 edition of *Wuthering Heights*.)

10) Charlotte は次のように述べている——‘. . . from the trembling hand, the un-nerved limbs, the fading eyes, the same service was exacted as they had rendered in health.’ (*Ibid.*)

11) Scarborough. Anne は Robinson 家の家庭教師をしていた時、ここに何度か来たことがあった。

ットもついに折れて承諾した。シャーロットとその親友の一人(エレン)に付き添われて海岸へ行ったアンは、入り日が海の波、沖行く舟、断崖の古城などを黄金色に染めるのを、無言でじっとみつめたそうである。¹²⁾そしてその1849年5月28日の夜半、29才の春を迎えたばかりのアンは、静かに幸うすき生涯を閉じ、¹³⁾彼女の好きだったその海辺の地に葬られたのである。

このようにしてシャーロットは、老いた父と二人だけ後に残された。彼女の悲しみ嘆きがどれほどのものだったかは、述べるまでもなからう。長いトンネルを抜けて、やっと光がさし始めたと思われたのも束の間で、弟と二人の妹とを僅か9カ月の間に相次いで失った彼女は、前途暗澹たるものを感じたに相違ない。その時33才の彼女は、「人生はつらく短く——空虚なように思われます」¹⁴⁾と書いている。神の力に支えられた彼女は、その後6年近く生き永らえるが、太陽が沈む前のあかあかとした残照とも言えるようなその後の年月を辿る前に、ここでエミリの『嵐が丘』に触れてみよう。

イギリスの現代の優れた批評家でもあり小説家でもあるウォルター・アレンは、『嵐が丘』は、「英語で書かれた最も驚くべき小説である。それは完璧なものであり、しかも類まれな完璧さを持ち、人間と人生の本質についてのきわめて独自の把握を完全に具体化したものである」¹⁵⁾と述べている。この作

12) Charlotte と一緒に Anne に付き添った Ellen Nussey は Mrs Gaskell あての手記で次のように記している——‘. . . The evening closed in with the most glorious sunset ever witnessed. The castle on the cliff stood in proud glory gilded by the rays of the declining sun. The distant ships glittered like burnished gold; the little boats near the beach heaved on the ebbing tide, inviting occupants. The view was grand beyond description. Anne was drawn in her easy chair to the window, to enjoy the scene with us. . . . (Mrs Gaskell’s *The Life of Charlotte Brontë*, Oxford Classics, pp.317-318). Charlotte も ‘A peaceful sun gilded her evening.’ と W. S. Williams あての手紙 (June 4, 1849) の中で記している。

13) Anne の最後の言葉は、‘Take courage, Charlotte; take courage—’であった。

14) ‘. . . life seems bitter, brief—blank.’ (Letter to W.S. Williams, June 13, 1849).

15) Walter Allen, *The English Novel* (Phoenix House, 1954), p. 185 (和知・大榎・直野・藤本共訳『イギリスの小説』, 文理, 1975, p. 258.

では、まことに不可思議で当惑させるほどの内容が、完璧な芸術的表現を得ているが、前にも触れたように、発表当時はほとんど無視されたが、今ではこの小説の偉大さを疑う人はないと言っても過言ではない。

荒涼としたヨークシャー州の荒野の一隅に「嵐が丘」と呼ばれる邸があり、その主人がある時旅から帰って来た時、一人の浮浪児を連れ帰り、ヒースクリッフ（ヒースの生えた荒野の崖の意）と名づけて養育する。ヒースクリッフは異国人のように髪が黒く剛情で野蛮な子供だったが、その邸の娘キャサリンとは妙に心が解け合い、一緒に荒野を歩き廻ったりする。主人が亡くなると、邸の主になったその子ヒンドリーはヒースクリッフを下僕としてこき使い虐待する。そのうちに成長したキャサリンは、ふとしたことで数マイル離れたリントン家と親しくなり、その邸の息子エドガーに求婚される。キャサリンは心の底ではヒースクリッフとの一体感を感じながらも、エドガーの教養のある洗練された容姿に魅かれて結婚を承諾する。それを知ったヒースクリッフは、突然邸から姿を消してしまう。しかし何年か後に帰って来た時は、どうしてかは記されていないが、一応紳士らしい教養も身につけ大金を持っている。これからこの男の、悪魔のような執拗で残忍な復讐が始まる。

先ず第一に彼は、自分を虐待したヒンドリーを墮落させて、金に困った彼から邸を買い取り、その子には教育を与えず、自分がされたと同じように家畜同様に育てる。また彼が愛していたキャサリンの夫となったエドガーに復讐しようと、その妹を誘惑して結婚した後、虐待して死に至らせる。ある時彼はついにキャサリンを訪れて、互いに相抱くが、その激情の発作のあとキャサリンは女の子を産み落して死ぬ。ヒースクリッフは狂ったように恋い慕い、彼女の埋められている墓をあばき、死骸を抱いて狂喜するが、やがて自分も死に果てる。この小説の中では、その他にもまだ多くの人物が死ぬが、ヒースクリッフの子とキャサリンの子とが愛情に結ばれて物語は終わる。

この小説には常識や日常の生活を超越した世界、慣習的な善悪の道徳とはまったく違った世界が描き出されており、善悪も生死も問題にしない激烈な愛情に基づく仮借なき復讐のすさまじさは、多くの読者をその当時も今も身

震いさせる。ここに見られるものは嫉妬、憎悪、粗暴、傲慢、貪欲、策略、狂乱といった反人道的なものばかりで、ヒースクリッフは人間ではなく悪魔とも思えるほどで、キャサリン以外のすべての人の墮落や死を、まったく平然と受けとめて眉ひとつ動かさない。彼は悪鬼とも見えようが、いかに具体的にまなましく描かれていても、これはあくまでも精神の世界である。作中人物と彼らの行動が、表面上はとても信じがたいにもかかわらず、読者に真実感を与えて納得させるのは、そのためである。もし我々が人間の心の深さ、複雑さに静かに思いを致せば、エミリ・ブロンテが『嵐が丘』で描き出したヒースクリッフの悪魔的な姿は、慣習や道徳をはるかに越えた根源的な愛に基づくものであり、ある意味で真実だと思えることができよう。

『嵐が丘』はシェイクスピアの悲劇と同じ高さに達していると見る人が多い。権力への野望に燃えて主君を殺すマクベス、嫉妬に狂って最愛の妻を刺すオセロ、愛する末娘の真心を信じられず、うわべだけのおべっかを言う上の娘たちに裏切られて狂気になるリア王などの悲劇は、いずれも、人間の抜きさしならぬ業の悲しさを描き出している。我々はそれらを読んだり見たりして身震いすると同時に、たとえようもなく感動する。それは野心も嫉妬も恋慕の情も復讐心も我々みなの中の一面が拡大されたのを見る思いがして、その真実のもつ怖ろしさに心打たれるからである。

エミリ・ブロンテは、人間というこの複雑で悲しい実体に、丁度自分の肉体の苦しみに敢然と耐えたように、透徹した鋭い目を向けて対したのであり、人間の普遍性を、直観によって見出し象徴化したのである。

この小説ではキャサリンもヒースクリッフも死ぬが、物語の最後で、雨に打たれたまま死んだヒースクリッフの顔を見た人には、彼が微笑すら浮かべているのが見えた、と記されている。彼は永遠の愛を得ることによって、生と死を越えた世界に安住したのであろうか。エミリの詩の一つに次の一節が見られる――

臆病なたましいはわたしにはない

現世の嵐にもまれる領域でおのき^{おび}怯える者でもない
 わたしは天の光栄が輝くのを見る
 そして「信念」がわたしを恐怖から護ってそれに劣らず輝くのだ。¹⁶⁾

(安藤一郎訳)

ここには『嵐が丘』を貫いている生や死、不滅についての根源的な思索と同じものが歌われている。

『嵐が丘』の物語は、この無気味な事件の途中で南の地から来て邸を借りた商人が、主人公ヒースクリップを小さい時から知っている女中ネリーから、彼にまつわる異常な出来事を聞く形になっている。この非常に特長のある構成は、深い意味を暗示しており、また物語が2代以上にわたって展開することも、時間が人間生活に対して持つ深遠な意味によって、ある点でこの作品のかもす悲劇性を和らげる働きをしている。

これらについては詳述する余裕はないが、今一つこの小説の重要な要素となっているのは、陰惨、残酷な物語の中に組み入れられている美しい自然描写である。しかし自然描写はけっして単なる装飾ではない。自然の営みが人間のドラマを動かす意味深い働きをするものになっている。¹⁷⁾ エミリは自然児と言えるほど荒野を愛し、それなくしては生きられないほどだったことは前述したが、彼女はこの『嵐が丘』の中に、荒野の四季を通じてのあらゆる姿を、自然の本質を把握して描き出している。自然はうるわしい花の咲く時のみではない。人間の醜悪な葛藤を取り巻く荒野には嵐の吹きすさぶ苛烈さも

16) No coward soul is mine/ no trembler in the world's storm-troubled sphere/
 I see Heaven's glories shine/ And Faith shines equal arming me from Fear.
 (Jan. 2, 1846)

17) この点について例えば Winnifred Gérin は次のように述べている—— “The laws of Nature, as revealed in the elements of earth, fire, wind and water, are the all-powerful agents of this tale. Never before in English fiction (and only once in Shakespeare) had the elements been made the agents of a human drama.” (*The Brontës: “The Creative Work”* [Writers & their Work, 1974], p. 45.)

すべてを呑み込む寂寥もある。しかし大いなる自然は、小さな人間の憎しみや醜い情念をも抱く暖かさをも秘めていて、悪魔的なヒースクリッフの所業と微妙な調和をなし、読者はそのためにかえって強烈な印象を与えられるのである。

『嵐が丘』は、ある面ではヒースクリッフの復讐を描いたものだが、彼が復讐するのは、彼が虐待され、キャサリンの本源的な愛が挫折させられるからである。彼はそれらの両者に対する復讐として、つまり彼を阻害したものを取り除くために、彼らの財産をかちとり、ついには死に至らせるのである。彼は究極のところ、悪鬼でも怪物でもなく、むしろ愛の根源的な姿なのである。

エミリにとって愛は、本質的に怖ろしい危険なものであり、怖ろしくない愛は真の愛とは言えない。『嵐が丘』という小説は、「音にみちています——それは嵐や疾風の音です——」¹⁸⁾と述べた批評家もあるが、この小説は嵐の吹きすさぶ荒野を舞台として、嵐や疾風のように熾烈な愛が、すさまじい音を立てて全篇にみなぎっている。そしてこの小説を読む人々に、愛するとは本当はどのようなことなのか、心と心との真の結びつきとは何を意味するのか——そういった人間についての最も根本の問題を問いつづけ、我々人間の存在にひそむ本質的な悲しさ、そして複雑な美しさに思いを致させてくれる。なぜなら『嵐が丘』は、究極的には愛を賛美した小説に外ならないからである。

4) 『ジェイン・エア』とシャーロット・ブロンテの愛

『ジェイン・エア』は、父母に死なれた薄幸の少女が自らの生涯を語る形をとり、すべてが激情的なヒロインの心に映じたままが書かれている主観的な小説である。物語は10才の孤児ジェインが、引き取られている伯母とその

18) Cf. E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (Pocket Edition; Edward Arnold & Co., 1949), p. 134: 'Wuthering Heights is filled with sound—storm and rushing wind—a sound more important than words and thoughts.'

子供たちに虐待されるところから始まる。それを不当だと反抗するジェインに手を焼いた伯母は、ジェインを慈善学校に追いやる。その学校の責任者がまた冷酷な偽善家で、ジェインは再び憤りと屈辱の日々を送るが、寛容な女校長の理解と、作者の姉をもとにしたと言われる一人の生徒のやさしさとに救われる。やがて19才になったジェインは自活の道を家庭教師の職に求め、大邸宅にやとわれ、そこの主人が若い頃フランスで遊蕩の生活を送って女優との間にできた女の子を教えることになる。まもなくジェインは主人ロチェスター氏と互いに激しく愛し合い結婚を約束する。しかし結婚式を挙げる教会で、ロチェスターには気の狂った妻があり、邸にかくされていることがわかる。ジェインはロチェスターに深い愛を感じながらも、彼の嘆願を振り切って邸を飛び出し、数日の放浪ののち飢えと疲労の果てに、ある家の前で倒れ助けられる。その家は彼女のいとこの牧師の家だとわかり、そのうちに東洋へ伝道に旅立つ牧師は、ジェインに妻になって同行することを頼む。ジェインは神への奉仕に意義を認め、躊躇ののち、まさに承諾しようとする時、どこからともなく「ジェイン、ジェイン、！」と呼ぶ声を聞く。彼女は急いで以前の邸を訪れ、気狂いの妻が邸に火を放って自らも焼け死んだことを知る。そして火事によって不具になったロチェスターを見つけて結婚する。

以上が『ジェイン・エア』の物語の概略だが、それはシンデレラ物語に類似した少女物語だとか、逃避小説だと言われることもあるが、けっしてそうだと言い切ることはできない。ジェインが最後に結婚する時のロチェスターは不具である。彼女は逞しい男にいくら財産があっても、見下されている時は、激しい愛を感じても結婚しようとせず、情婦になることを求めるロチェスターに対して次のように叫ぶ——「……あなたはわたしを自動人形——感情のない機械だとお考えですか……あたしが貧しく身分が低くて醜くてちっぽけだからといって、魂も心もないとお考えなのですか？——間違っているんです。あたしはあなたと同じだけ魂を持っています。同じだけ心を持っています！」¹⁹⁾

19) 'Do you think I am an automaton?—a machine without feelings? . . . Do

ジェインのこの反抗的とも思える自己主張には大きな歴史的意義がある。それは物質よりも精神に大きな価値をおく姿勢であり、人間を社会的地位や容貌などの外面的なものや女性であることによって評価を変えることなく、個性を尊重しようとする考え方である。今から150年ぐらい前の19世紀前半では、イギリスにおいても女性はまだ男性より低く見られており、ジェインのような名もなく貧しくて美しくもない少女が、このように身分の上の男性に向かって敢然と自己の個性の尊厳性を主張することは、まことに驚くべきことだった。それだけに当時の人々の中には、この小説を非難する人も多かったが、²⁰⁾ この考え方に共鳴する人もより多くおり、イギリスにおける個性尊重、女性を男性と平等に見る気風の促進に、この小説は大きな働きをしたのである。

『ジェイン・エア』の持つそうした歴史的意義はきわめて大きいですが、それとは別にシャーロット・ブロンテという一女性の妥協を許さない、また悲痛な魂の表現としての面も見落としてはならない。シャーロットは人並すぐれた才能の持主だったが、彼女を取り巻く環境は、彼女に卓越した才能を発揮する場を与えなかった。それは彼女が女性だったためでもあり、貧しい牧師の娘で、しかも母を幼時に失って一家の主婦がわりとしての義務と責任を強く感じていたためでもある。彼女はその現実を勇気をもって耐え忍んだ。しかし胸のうちには現実を打破したいとの想いが溢れていたに相違ない。現実では吐け口のない想いを耐え忍んでいただけに、彼女はそれを仮空の世界に、まるで火山の爆発のようにはげしく爆発させたとは考えられないだろう

you think, because I am poor, obscure, plain and little, I am soulless and heartless? You think wrong!—I have as much soul as you—and full as much heart! . . .’ (Chap. xxiii).

- 20) 例えば *Quarterly Review* (December, 1848) にのった無署名の書評 (Elizabeth Rigby によるもの) は Brontë 姉妹の小説を良俗を破壊しようとするものと酷評して、次のように述べている——‘. . . Whoever it be, it is a person who, with great mental powers, combines a total ignorance of the habits of society, a great coarseness of taste, and a heathenish doctrine of religion. . . .’
(*The Brontës: The Critical Heritage*, ed. Miriam Allot, 1974, p. 111.)

か。

物語のヒロインであるジェインは、シャーロットと同じく身体も小さく美貌でもなく財産も持たないが、人並すぐれた才能の持主である。それ故ヒロインは作者自身の投影であり、この小説は作者の魂の叫びだと言われることがよくあり、それも当然である。

しかし一つ注目すべき相違がある。現実のシャーロットには老いた父と3人の弟妹があるのに対し、物語の中のジェインは孤児である。孤児はもちろん孤独だが、その反面、自分独自の生き方ができる。エミリは父やきょうだいを気にせず、日常の生活に超然として独自の道を歩んだ。その自己ひとり立つ勇氣は、まことに強く尊いものだったが、姉のシャーロットにはそうした生き方は不可能である。たとえエミリに劣らぬ強固な自立心を持っていたとしても、一家の主婦がわりのシャーロットにはそれは許されない。彼女が幼い時からその責任感を強烈に感じていたことは、友人も語っている通りである。²¹⁾しかしシャーロットには、同時に人並以上の才能を持つとの自信もあった。

この両者、すなわち芸術創造への意欲と、家計を収めねばならないとの義務感とが、彼女の胸の奥底で、ずっと熾烈な戦いを続けたのである。生来嫌でたまらなかつた家庭教師を再三勤めたり、学校の経営を計画したことは、義務感、責任感から出たものである。その試みにすべて失敗した彼女の苦悩は、何がいやしてくれただろうか。何もなかつた。長い間彼女をせき立てた第一の目標がすべて挫折させられた時、彼女が書いたのが『ジェイン・エア』である。そこに彼女が、もしかりに自分が何の係累もない孤児であった

21) Roe Head の Miss Wooler の学校で Charlotte と知り合い、その後一生を通じての友となった Ellen Nussey が、当時の学校生活を回想した手記の中で次のように述べている—— ‘She always seemed to feel that a deep responsibility rested upon her; that she was an object of expense to those at home, and that she must use every moment to attain the purpose for which she was sent to school, i.e., to fit herself for governess life’ (The Shakespeare Head Brontë, *The Life and Letters*, Vol. I, p. 94.)

ら、どうなるだろうか、いやどうするだろうか、という現実ではけっして許されない状況を設定して、充実した生活への燃える意欲をもつ一人の女の可能性を探ったとしても、それは満たされない夢を追う女のはかない愚かなたわむれ、少女的な幼さだと言い切れるであろうか。『ジェイン・エア』のヒロインが孤児とされている点に、作者シャーロット・ブロンテの、ぎりぎりの瀬戸ぎわに押しやられた女としての、切ない悲痛な叫びが聞かれる思いがしてならない。

シャーロットはブロンテ姉妹のなかで一番人間的で、女らしかった、と述べている人もあり²²⁾、その通りであろう。しかし人間的であることは、芸術家としてマイナスになることが多いもので、事実『ジェイン・エア』は『嵐が丘』よりも芸術的に劣るとされることが多い。しかし私は、『ジェイン・エア』は『嵐が丘』より芸術的に劣っているにせよ、なま身の人間、過ちや弱さをのがれられない人間の赤裸々な悲痛な叫びとして、それ独自の価値を持つことを信じて疑わない。

とはいえシャーロットは、美の追求のために妻子を捨ててタヒチ島に走った画家ゴーギャンの行動を取ろうとは思わず、ましてや父や弟妹の死を願ったわけではけっしてない。それどころか、彼女は誰よりも肉親への愛情が強く、前述したように、あっという間に弟と二人の妹とを失うと、絶望的な苦しみに投げ込まれたのである。「孤独に生きる者にとって、空がどんなに素晴²³⁾らしい友になるかは、あなたにはおわかりにならない」と彼女は知人に言っている。また「大きな苦しみが、夕暮が迫り夜が歩みよると訪れてきます。

22) Cf. 'Of all the Brontës, Charlotte was the most human. Of the sisters she was at heart the most feminine.' (Lawrence and E. M. Hanson, *The Four Brontës*, Oxford University Press, 1949, p. 117.)

23) Mrs. Gaskell は、Charlotte に初めて会った時の印象を友に書き送った手紙の一節を *The Life of Charlotte Brontë* にうつしているが、これはその一節である——'She (i.e. Charlotte) said . . . that I had no idea what a companion the sky became to anyone living in solitude—more than any inanimate object on earth—more than the moors themselves.' (Oxford Classics, Ch. xxi, p. 363.)

その時刻に私たちは食堂に集まり、話し合ったものでした。だが今は私ひとりが坐り、仕方なく黙りこんでいます。彼らの臨終の日々を思い、その苦悶を思い浮かべずにはおれないのです。彼らの言ったこと行なったこと、それから彼らの死の苦しみの中の顔を……」²⁴⁾と、アンの死後1カ月ぐらいの時、親友にあてて書いている。

シャーロットはこのような悲嘆のさ中にも、勇気を奮い起こして次の小説を書いている。それには『シャーリー』という題がつけられているが、その名のヒロインは、エミリがもし富と社会的地位のある家に生まれていたら、こうであったであろうと思われる女性にされていると言われている。シャーロットはここでも、妹が置かれた現実の状況をさかさまにしているわけだが、彼女がこのように想像の世界に自分や妹を置いて見ることは、現実を耐え忍ぶ上でのぎりぎりの方法ではなかったかとも思える。

シャーロットは弟と妹たちの死後、その他にも種々の仕事をしている。その一つは、彼女の小説を出版してくれ、その後も親交のあるスミス氏によって、妹たちの小説²⁵⁾を再発行してもらったことである。それに付した妹たちを偲ぶ序文は貴重なものである。またその後も3度ほどロンドンに招かれて、²⁶⁾輝かしい女流作家として優遇されることもあった。しかし彼女は華やかな社交がまったく苦手で、いつも間もなく牧師館に立ち帰った。そこには72才の父と78才の女中タビーだけしか居らず、柱時計のチクタクの音だけがう

24) 'The great trial is when evening closes and night approaches—At that hour we used to assemble in the dining-room—we used to talk—Now I sit by myself—necessarily I am silent—I cannot help thinking of their last days—remembering their sufferings and what they said and did and how they looked in mortal affliction . . .' (Letter to Ellen Nussey, June 23, 1849.)

25) *Wuthering Heights, Agnes Grey, together with a selection of Poems by Ellis and Acton Bell*. Prefixed with a Biographical Memoir of the authors by Currer Bell. Smith, Elder, London, 1850.

26) November—December, 1849. この時 Charlotte は初めて Thackeray と Harriet Martineau に会った。その次は1850年6月で、その時 G. H. Lewes に会った。次は1851年5月から6月で、この時 Thackeray の講演を聞き、「大英博覧会」を見た。

つろに時を刻んでいた。

小説家として有名になった彼女の名は、ロンドンのみならず地方にも知れわたり、ある貴族²⁷⁾に招かれて湖水地方に旅したりすることもあったが、弟と妹たちを失った心の傷はいえることなく、彼女を理解してくれる話し相手もない彼女は、いつもまったくの孤独の中で暗鬱な日々を送り、健康もすぐれないことが多く、1851年の冬には肝臓をわづらって4カ月も寝込んでしまうほどだった。また父もすっかり老い衰え、目もほとんど見えなくなってシャーロットの重荷になった。そうした苦痛と孤愁のさなかにも彼女は、1852年11月に『ヴィレット』を書き上げた。その表題となっているヴィレットとは、彼女が留学したブリュッセルの仮名で、この小説はエジェ寄宿学校での経験をもとにしたものである。最初の長篇小説で、出版の引き受け手のなかった『教授』も同じ経験をもとにしたものだが、後に書かれた『ヴィレット』の方が、はるかに詩的な密度の濃厚な作になっていて、彼女の小説の中で芸術的に最も優れているとする人も多い。²⁸⁾

『ヴィレット』はシャーロットが37才になる少し前に発表されたが、²⁹⁾その少し前に彼女の生涯における最後の大きな出来事が起こった。それは父の牧師補のニコルズ³⁰⁾が彼女に求婚したことである。彼女は身体はちっぽけで、けっして美貌とは言えず、少女の頃友の一人から不器量だと云われた³¹⁾ほどで、

27) Sir James Kay-Shuttleworth at Windermere.

28) 例えば George Eliot も次のように賞賛している——‘. . . I have been reading “Villette,” a still more wonderful book than “Jane Eyre.” There is something almost preternatural in its power.’ (Letter to Mrs. Bray, February 15, 1853.)

29) *Villette*, by Currer Bell, 3 vols. Smith, Elder, London, January 1853.

30) The Rev. Arthur Bell Nicholls (1818-1906).

31) Charlotte の親友 Mary Taylor が Mrs. Gaskell あてに、Charlotte の Roe Head 時代の印象を書き送った手紙に次のように述べられている——‘. . . It was about this time I told her she was very ugly. Some years afterwards I told her I thought I had been very impertinent. She replied, “You did me a great deal of good, Polly, so don’t repent of it.” (The Shakespeare Head Brontë, *The Life and Letters*, Vol. I, p. 90.)

自分の容姿にひけ目を感じていたが、その物静かで品位のある人柄は、特徴のある目や物腰全体に輝き出て、自然と人々を魅きつけたようで、それまでも何度も求婚されている。

最初は親友の兄の牧師³²⁾、次は父を訪ねて来て暫らく滞在したアイルランド人の牧師³³⁾、三番目は父の副牧師³⁴⁾、といった具合だが、どの場合にも彼女の方から断わっている。また求婚されたわけではないが、出版社の社主スミス氏との噂もあったし、また出版社の用事で牧師館を訪れたシェイムズ・テイラーが彼女に並々ならぬ好意を寄せたこともあったが、その好意も進展せず、彼が間もなくインドに去って、その件もそのままに終わった。³⁵⁾ このように好意を寄せられても彼女が進んでそれを受けようとしなかったのは、彼女が相手の男を不足だと思ったからではない。彼女は完璧な男性を求めたのではなく、むしろ欠点はあっても自分と融合できる人を求めたのである。結婚生活は共同作業であり、互いに相手を知り合い、尊敬し合い、愛し合うのでなければならぬと考えたからである。

とすると、今度彼女に求婚したニコルズはどうだったであろうか。彼はシャーロットより一つ年下で、ダブリンの大学を出ていたが、ただ生真面目で善

32) Ellen Nussey の兄 The Rev. Henry Nussey が1839年3月に求婚した。

33) An Irish Curate, the Rev. David Bryce. 彼は同年求婚し断われ、翌年急死した。

34) The Rev. William Weightman. 彼は1839年に Mr. Brontë の牧師補として Haworth に来、1842年まで勤めたが、明るい性格でみなに好かれ、Charlotte を訪れた Ellen や、Anne にも好かれ、殊に Anne は彼に魅かれたらしい。彼は1842年コレラで亡くなった。

35) James Taylor は1851年4月出版社の用事で Haworth に立ち寄り、その後たびたび文通したが、突然ボンベイへ旅立った。W. Gérin は彼の Charlotte に及ぼした影響を大きく見、次のように記している——‘The circumstances of his loss—the distance and danger of the voyage from India, and the letters for which she waited and which came no more—became a part of the texture of *Villette*, in which the loss of one lover by shipwreck and the defection of the other, for whose letters she waited in mental agony when the post-hour came, supplied the emotional climaxes of the tale.’ (*Charlotte Brontë*, Oxford, 1967, pp. 507-508.)

良だけが取柄という平凡な男だった。彼は1844年からその時まで8年あまりブロンテ氏の牧師補を勤めており、早くからシャーロットに魅かれていた。周囲の人で彼のそぶりが変になったのに気付いた人もあったが、シャーロットは彼を無視し続けていたのに、突然求婚されたわけである。

彼女は友への手紙の中でその時のことを次のように書いている——「彼の様子といったら——あなたに見せたかったわ——けっして私は忘れられませぬ。頭のとっぺんから足の先までぶるぶる震え、死人のように蒼ざめ、声低く、熱をこめて、しかしやっとのことで、彼は見込みのなさそうな愛の告白をすることが男性にいかにも苦しいものかを、私に初めて感じさせたのです。普段はまるで彫像のような人が、震え興奮し、くたくたになっている有様が、私を不思議にも揺り動かしました……」³⁶⁾

まさにその通り、ニコルズの激しい愛の告白に、36才のシャーロットの心は揺り動かされたのである。しかしこれを聞いた父は目を血走らせ、烈火のように怒り出したので、彼女は翌朝ノーの答えをした。その時の彼女はニコルズの愛に心を動かされたが、父の反対を押し切ってまで結婚しよう、という気持にはなっていなかったからである。ニコルズは絶望のはてに教会の勤めも怠りがちになり、半年ほどしてついに職を辞して他の地に移った。シャーロットは、いつまでも門に立ちつくして泣いている彼を見送ったと言われている。

しかしこの件はこれで終わりにはならなかった。ニコルズはまもなく近くに職を求め、シャーロットとひそかに相逢ようになった。しかし彼女は、ニコルズのあとに来た牧師補が気に入らないで困っている父を見ても、ニコ

36) ‘. . . his manner—you can hardly realise—never can I forget it. Shaking from head to foot, looking deadly pale, speaking low, vehemently yet with difficulty—he made me for the first time feel what it cost a man to declare affection where he doubts response.

‘The spectacle of one ordinarily so statue-like, thus trembling, stirred, and overcome, gave me a kind of strange shock. . . .’ (Letter to Ellen Nussey, December 15, 1852.)

ルズのことを再び持ち出す勇気がなく、悶々として病気になってしまった。

その年はこうした状態が続くが、翌1854年1月、ニコルズは再びブロンテ氏にシャーロットとの結婚を頼んで拒絶されるが、シャーロットはついに受け入れる決心をし、結婚後も父と同居するとの条件をつけて父に頼み、ブロンテ氏もやっと承諾することになる。シャーロットは、ニコルズが彼女を大小説家としてではなく、一人の女として愛してくれることに心を動かされたのである。

1854年6月29日ハウスの教会で結婚式を挙げた二人は、ニコルズの故郷アイルランドに新婚旅行に出かけた。この結婚がシャーロットにとって幸福であったかどうかは、我々にはわからないが、友への手紙の中に、「女が妻となることは厳粛で不思議で、そして危険なことです³⁷⁾」と書いている。ただ言えることは、彼女が夫に愛情をこめてつくすことに大きな喜びを感じていたようだ³⁸⁾、ということであり、彼女は平穏で満ち足りた新婚の日々を送ったようである。

その年の11月、彼女は夫と散歩に出た時、誘われるままに少し遠くの滝を見に行き途中から激しく降り出した雨に濡れて風邪を引いた。この時妊娠していた彼女はそのまま寝こんでしまう。翌年になると病状が悪化し、苦しみが1月から3月まで続き、ついに3月31日の夜、姉や妹たちと同じ肺結核のため、短いけれど永遠に輝かしい生涯を終えた。この時彼女は39才の誕生日をあと1カ月ほどで迎えるところで、ニコルズと結婚してから僅か9カ月経ったばかりだった。彼女の父ブロンテ氏は、その後6年生き永らえて、84才でこの世を去っている。

37) ‘. . . It is a solemn and strange and perilous thing for a woman to become a wife.’ (Letter to Ellen Nussey, August 9, 1854.)

38) Cf. ‘Since I came home, I have not had an unemployed moment ; my life is changed indeed, to be wanted continually, to be constantly called for and occupied seems so strange : yet it is a marvellously good thing. As yet I don’t quite understand how some wives grow so selfish. As far as my experience of matrimony goes, I think it tends to draw you out of and away from yourself.’ (*Ibid.*)

これまでブロンテ姉妹の生涯の概略を辿ってきた。それはたとえようのないほど孤独で悲劇的な生涯だが、特にシャーロットの一生以上に悲愴で美しいものはあまりないのではなからうか。美しい、と言ったのは、彼女が生涯のどの瞬間においても常に、心と身体のすべてを一つのことにおぼっつけているからである。何事によらず一つのこと熱中している人の姿ほど尊く美しいものはない。また彼女の生涯の中で特にあわれに思えるのは、善良だが平凡な夫との僅か9カ月ほどの結婚生活に、彼女が幸せを感じていたように思えることである。『ジェイン・エア』をはじめ、不朽の名作をいくつか書き残した大小説家の、一人の女としての姿を思うと、人間の、女の悲しさと美しさに感動させられるのである。

誰のあわれみをも寄せつけようとせず、最後の最後まで毅然として死の神を迎えたエミリにとって、愛とは怖ろしいものであり、一たびそれが妨害されると、何物をも破壊せずにはおかないものだが、それとは違ってシャーロットにとっての愛は、清らかであり、生きた炎であり、暖め照らすものである。エミリの見た愛も、シャーロットの愛も、どちらも真実であろう。ただシャーロットの描いた愛は、彼女がその一生を通じて探し求め、しかもついに得られなかったものかもしれない。彼女のそのあわれさが、彼女の作品の欠点につながっていることは疑いない。しかし私のように、いくつになっても多くの欠点からのがれられない凡人にとっては、シャーロット・ブロンテという人間のあわれさが痛いほど身にしみる思いがするし、彼女の小説にますます心動かされずにはおれないのである。